



「魯迅之碑」除幕 60 周年 「許広平女士のあいさつ」より続く

藤野先生が魯迅に贈られた、裏に「惜別」とお書きになったお写真は、魯迅記念博物館に今でも大事に保存されてあります。学生の国籍がたとえ異なっても、教育に差別をつけなかった先生の誠実な性格に対して、非常な尊敬を払い追慕していました。晩年、日本の友人宛の手紙の中でも、幾度となく先生の事に触れていました。日中両国人民の友好的往来と文化交流とは、両国人民相互の理解と友誼を促進するのに、大切な役割を果たしているのです。

この点で魯迅の行った仕事は、今、我々に立派な手本を示してくれています。もし魯迅が若くして日本に留学した時期に、藤野先生が彼に示した誠実な態度が得がたい事であるというならば、魯迅の晩年の努力によって多数の日本の友人達が中国に多くの同情と支持とを寄せられました事は、日中両国人民の間の友誼に、一つの発展が見られた事を明示す

るものであります。

ここで一つ歴史を振り返ってみる事にいたしましょう。魯迅は仙台で医学を捨ててから、ひたすら文芸運動に力を入れ、文芸というこの武器を、故国の現実を改革する工具とし、文化交流の架け橋として、日中両国人民の相互理解を深めてまいりました。魯迅の生涯で、翻訳と外国作品紹介の面で費やしたその精力は、創作の面にくらべて決して少なかったわけではなく、しかもこれらの紹介と翻訳のうちで多くの日本の作家の創作と論著は、差し当たって中国人民に有利なものでありさえすれば、苦勞をいとわず辞せず中国に紹介しようとしたしました。

『現代日本小説集』と『壁下訳叢』(壁下翻訳集)の中には数多くの日本作家の作品が、魯迅の手により中国に紹介されています。それとともに、魯迅は中国の読者に日本の作品を知らせたばかりでなく、日本人民の中国文化を理解する手助けもいたしました。『中国小説史略』はずっと以前から日本の各大学で教科書教材として学生に紹介され、そして広く知られていました。その後、増田渉先生がこの本を訳された時に、彼は誠意ある援助を増田教授に与えました。日本語に訳された『中国小説史略』を見た時は、抑えきれない喜びの気持ちで、その本の序文に「何よりも嬉しい」と書きました。この喜びは、ただ彼の個人的な気持ちばかりでなく、中日両国文化交流を目の当たりにした、大きな喜びの気持ちの発露でもありました。

当時、『中国小説史略』は日本語の訳本があったばかりでなく、魯人の小説やその他の作品も日本の読者には紹介されておりました。この時、魯迅は文化交流の架け橋によって両国人民の相互理解を更に深める事ができたはずですが、しかし日本軍国主義の中国侵略により両国人民間の友誼的往来は一時中断されたのです。その際、彼は言っていました。「日本と中国との人民の間には必ず相互理解の時が来るだろう」と。今、このような予言が、予測が実現されたのであります。

魯迅の作品が中国の広大な青年層の間に愛好され、魯迅の人柄が敬愛と尊崇の念を集め得たのは、その作品が広く深く、圧迫された人民の願望を反映したからに他なりません。彼の作品には愛憎が明らかで、人民を熱愛はしましたが、人民を圧迫する当事者には、この上もない憎しみを投げかけ、外来の侵略者には徹底的に反抗する固い決意を示しました。そこが屈服に甘んじない日本人民の共鳴をよび、日本の読者は、中国人民が帝国主義に反対する闘争のうちに断固として立ち上がったのを目の当たりにみて、魯迅の作品を取り上げ、作品の中に勝利を獲得できる一条の道を求めようとした。これは決して偶然な事ではありません。

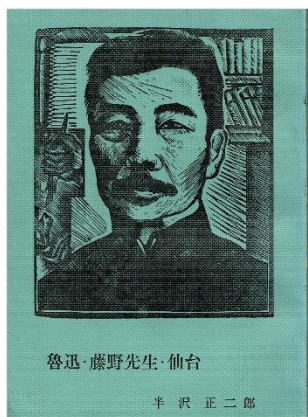
魯迅はその晩年、若い時に勉強した頃の、日本に再遊したい希望を持っていました。日本の友人に宛てて書いた手紙の中に「日本の景色の美しさは、私も時々思い出します」「もう一度日本に行きたい、これが私のずっと考えている事です」と書いているほどです。だが当時の客観的情勢からいって、彼のこの希望は実現しませんでした。けれども、時代の流れは誰もこれを阻止する事はできません。日本と中国の友誼願望はいかなる力もこれを抑える事はできません。今日、魯迅記念碑がここに建立されたこの事こそ、その有力な証拠なのです。

私はこの記念碑が両国人民の友好を記録する最も良い標識となり、中日両国の交わりを更に改善し、文化交流を展開させる前進の過程の更なる貴重な記念碑となるように希望いたします。最後に私は日本人民の繁栄と幸福とを謹んで祝福し、日中両国人民の友誼の揺るぎない事を祈ります。

※出典は『魯迅・藤野先生・仙台』(半沢正二郎著、昭和四十九年三月・第二版)＝写真⑦の「許広平女士のことば」。写真⑧は同書内の「魯迅の碑除幕の瞬間」。なお、あいさつ全文は建設委員会委員で東北大学教授でした内田道夫氏の訳ですが、一部漢字やことばづかいは、読みやすいように現代表記に変えています。文量の関係で活字が小さくなりました事をお詫びいたします。感想などお寄せください。(M)



魯迅の碑除幕の瞬間



魯迅・藤野先生・仙台

半沢正二郎